

D I G(Disaster Imagination Game)の過去、現在そして未来 Past, Present and Future of DIG (Disaster Imagination Game)

小村 隆史
Takashi KOMURA

常葉大学社会環境学部
Faculty of Society and Environment, Tokoha University

DIG (Disaster Imagination Game) is one of the most popular know-how of the participatory disaster management workshop in Japan. There are some turning point since its born in 1997; Kathmandu Experience in 2001, TOYOTA motor company Experience in 2004 and Hyogo Experience in 2004. Main purpose of DIG changed from “post-event” response oriented workshop in its early days to “pre-event” capacity building oriented workshop in present days. Future direction of DIG will be “Prevention First” oriented one and will contribute “Revise of Land use and Structure.”

Keywords: DIG (Disaster Imagination Game), Participatory BOSAI Workshop, Capacity Building, MIERU-KA and KAIZEN, Prevention First, Revise of Land use and Structure

1. はじめに

1997年3月、後にD I G(Disaster Imagination Game、ディグ)と呼ばれることになる参加型防災ワークショップのノウハウが生まれた。同年6月にはD I Gの名が与えられ、同11月には最初の学会発表も行われた。それから17年。(住民)参加型防災ワークショップの代名詞となったことは、考案者としては望外の喜びでもあるが、この間学術的な体系化を怠ってきた批判は甘えせざるを得ない。たとえ「ワークショップは生き物」であり、また、防災のポイントが土地土地で異なるがゆえに単純な標準化は危険かつ困難であるとしても。

D I Gとは、A 0大程度の地図を参加者が囲みながら、地域や施設でのリスクを「見える化」し、「参加者の共通認識」とした上で、「カイゼン」へと導くことを目指した参加型防災ワークショップのノウハウである。また、このような事態に陥らないためにはどうすればよいか、地域をどのように変えていけばよいかを考えさせるための、まちづくり・まちおこしワークショップのノウハウでもある。

防災・危機管理のプロ向きD I Gは、これらに加え、起こり得る事態を地図上で確認し、望まれる災害対応のため関係機関の連携をどのように具体化するかを検討するワークショップのノウハウでもある。

D I Gを「定義」するならば、このようなものになるだろう。これが学術的な定義として受け入れられるかどうかは、読者諸賢の判断に委ねる。ただ、この定義は、D I G誕生当初のものとは異なることは明確に述べておきたい。後述するように、筆者が「カトマンズ体験」と呼ぶものを契機に、D I Gは、開発当時のもの(以下「初期D I G」と)大きく趣の異なるものへ発展・深化してきた。この変化は、筆者自身の地域防災についての考え方の変化を反映したものであるが、それはさておき、東日本大震災後の今日に至るも、多くのD I GとD I Gを介した地域防災論議が「初期D I G」の「過ち」として筆者が捨ててきた、地域防災を間違った方向へと導きかねないものであることを、考

案者はどのように受け止めるべきであろうか。創作物のQ C(Quality Control)も考案者の責任であるならば、D I Gと地域防災に関する地域安全学会上での筆者の沈黙(≒怠慢)を取り返さなくてはなるまい。

そこで小論では、紙幅の限り、まず「初期D I G」を含むD I Gの「来し方」特に「初期D I G」が犯した「過ち」について、次いでD I Gのファシリテーター経験の中で形作られてきた地域防災力向上への筆者の問題意識について、最後に南海トラフ沿いの巨大地震を宿命づけられた時代に生きる我々が追求すべき地域防災のあり方とそれを意識したD I Gの「行く末」について述べ、各位の参考に供したい。

2. D I Gの誕生と「初期D I G」

(1) D I Gの誕生

D I Gは97年3月三重県津市で産声をあげた。D I Gは、①明るく元気な三重県各地の市民、②市民主体の防災訓練ノウハウを求めていた行政の防災担当職員、そして③自衛隊の指揮所演習ノウハウを知る防災研究者、の三者の出会いの産物であった。津市でD I Gのひな形(まだ名前はなかった)を見た三重の仲間たちは「これなら僕らでもできる」と自らが主催者となり、この(プレD I Gと呼ぶべき)防災ワークショップを何回も開催してくれた。そのことに意を強くした当時三重県消防防災課の平野昌氏と筆者の間でこのノウハウに名前をつけようとなり、ついた名前がD I Gであった。ちなみに音としてのD I G(ディグ)の名付け親は平野氏であり、それに Disaste(災害)、Imagination(想像力)、Game(ゲーム)との3つの単語を充てたのが筆者である。D I G発祥の際の、知る人ぞ知るエピソードである。

(2) 「初期D I G」の基本的な考え方

「大きな地図をみんなで囲み、災害対策本部運営のシミュレーションをやってみよう」

これが「初期D I G」のキャッチコピーである。阪神淡路大震災から2年。災害対応、特に大規模災害への対応は、行政だけで何とかなるような代物ではない。そこで行政も市民も老いも若きも男も女も、流行の言

葉で言うならステークホルダー総出で地図を囲み、起こり得る事態を「みえる化」し、発災後の対応をあらかじめシミュレーションしてみようではないか、というのが「初期D I G」の基本的な考えであった。

一般市民を防災の世界に巻き込み、行政も市民も立場を超えて議論し合う関係を作るといふ、地域防災における「出会い」「気づき」「団結」の演出ツール(としてのD I G)の必要性和有用性は、今日においても何ら変わるところはない。いわゆる「顔の見える関係づくり」である。ショーに他ならない展示型訓練や「やらされ感」満載の会場型訓練、あるいは「ご高説を賜る」類の講演会ではない、地域防災への誘いのツールが求められていた時代であった。参加型で公助の限界に気づかせ、市民の側でも何かをしなくては、という気にさせるツールとして、D I Gはある程度の役割を果たした、とすることは出来よう。文字通りゲーム感覚で、それと構えずに防災に携われるような参加型ワークショップのノウハウは、D I G以前には事実上存在していなかったのだから。

(3) 「初期D I G」は過ちを犯したのか

「初期D I G」は過ちを犯したのか。この表現を使うべきか否か、筆者にも迷いはある。あるが……。

東日本大震災後の今日においても、全国各地で「初期D I G」タイプのD I Gが行われている。このことは、地域防災への誘いのツールとして「初期D I G」が未だに「通用してしまっている」ことを意味する。しかし、そのD I Gは、今日の筆者からすれば「間違ったD I G」「地域防災の本質をとらえていないD I G」である。考案者に品質保証の責任があるとすれば、D I Gを間違った形で普及させてしまった責任の過半は筆者にあるのかもしれない。とはいえ同時に、あの3. 11を経ても、日本の防災人は「予防に勝る防災なし」という防災の本質を理解できていないのか、との思いも否定できない。「釜石の奇跡」を次の巨大災害に向けた教訓にしてはいけないということが、なぜわからないのか、恥ずかしくないのか、なのである。

災害予防への、災害に強いまちづくりへ、すなわち本来求められるべき地域防災力の向上へと誘おうとする時、「初期D I G」には明らかに限界があった。「未熟」「見直しが必要」の表現で誤魔化すことも出来ようが、自らと未だ初期D I Gを行っている地域防災関係者への戒めの念を込めて「初期D I G」は過ちを犯していた、と、表現することにしたい。その過ちは、状況により「致命的な」ものでもあったのだから。

ではその「初期D I G」の過ちとはどういうものか。またそこから見えてくる、本来求められるべき地域防災の姿とはどういうものなのだろうか。その点を述べる前に、筆者に初期D I Gの過ちに気づかせてくれた「カトマンズ体験」などについて触れておきたい。

3. 「カトマンズ体験」が気づかせてくれたもの

2001年の春と夏、筆者は、国際協力事業団(当時)とネパール国内務省との共同調査プロジェクト「ネパール国カトマンズ盆地地震防災計画調査」に携わる機会を得、当地に2か月ほど滞在した。当地で行ったD I Gは、内務省やカトマンズ市の防災担当者からは、かつての三重の防災ボランティアと同様、「これならば

僕らでもできる」と大変な好評を博すことができた。筆者の帰国後も、少なからぬ数の開発援助プログラムのように「ドナー国が引き上げたらプロジェクトがとん挫する」こともなく、カトマンズ市災害対策課の職員らによってD I Gが行われていると聞いている。

しかしながら、筆者自身は、自分で自分の行っていることを否定したい気持ちに常に襲われていた。「カトマンズ体験」で思い知らされたこととは、一言で言えば「(D I Gを含む)防災ワークショップで被害を減らすことは原理的に出来ない」という、よくよく考えてみれば当たり前のことであった。裏を返せば、その当たり前のことを十分認識をせずに防災ワークショップを行い、地域防災力の向上に貢献したと思いこんでいたのが、当時の未熟な己であった。

(1) 「防災意識の向上で被害を減らすことはできない」

(D I Gを含む)防災ワークショップの罪作りな点は、その独特の高揚感にあるとすることができよう。すなわち、ワークショップを行う(あるいは参加する)ことにより、住民も行政も「何かを達成した気になる」ことである。議論が重ねられ、参加者(関係者)間に共通認識が出来、プレゼンの形で合意が示され、主催者側に評価してもらえ、その過程は確かにある種の合意形成の場であり、そこでの議論が防災についての意識向上につながることは間違いない。しかし「予防に勝る防災なし」のテーゼからすれば、ワークショップの達成感も、被害の発生抑止には何らの貢献もない。

予防すなわち被害の発生抑止に向けた努力は、D I Gの高揚感に比べてはるかに地味なものだが、そこに地域防災の本質がある。鉄筋コンクリート造の建物に対する異常なまでの信頼、強制力のない建築基準と賄賂の額で決まる建築許可、建築の素人にも容易に理解可能な鉄筋(特に帯筋)の少なき等々は、国際防災協力を携わった経験を持つ者であればすぐにイメージ出来よう。そのような社会状況をわかっているながら「地震が起きたらどの道を通って避難しますか?」などと問うことは、自己欺瞞以外の何物でもありません。筆者には出来なかった。構造物の耐震性があってこそその地震防災なのだから。

もちろん、彼の地には貧しさがあった。「災害は貧しい者によりつらく」は、本格的に防災に携わるようになったごく初期から意識している言葉である。そしてこの短い言葉に防災の本質が示されていることはよくわかっていた。だが、そのことを百も承知であっても「貧しさゆえ被害を減らすことは出来ません」とまでは筆者には言えなかった。とはいえ、「何かあったらどうしますか?」というファシリテーションも出来ない。その意味では、カトマンズでのD I Gは煮え切らないものであった、とすべきなのかもしれない。

(2) “Risk Identification First!”(まずはリスクの洗い出し!)

ともあれ、カトマンズ滞在中に学んだことは多く、幾つかの点でD I Gのスタンスを基本的なところから変えるものとなった。その第一は、「まずはリスクの洗い出しを!(Risk Identification First!)」という考え方を明確に持ち得たことであった。

「初期D I G」とそれ以降を問わず、D I Gは「気づき」のツールである。また、参加し議論を交わす中で、どこでどのような被害が起こり得るのかを「みえる化」すなわち明文化・形式知化し共有化するノウハ

ウである。いつの間にかワークショップでは”Risk Identification First!”と連呼するようになっていた。気の利いた対策を語ったところではほとんどは「絵にかいた餅」であり「言うだけならタダ」、何かをやった気にはなったがその実は何も変わらず、である。繰り返すが、参加者をして「何かを達成したような気」にさせることは、極めて罪作りなことであろう。そこで、ワークショップの目的を「リスクの洗い出し」にとどめ、そこから先は「一朝一夕に解決できるような代物ではないが、そこにこそ本質がある」と述べることはあっても、あえて踏み込まないようにしたのである。

ちなみにこの「(短兵急に対策を求めず)まずはリスクの洗い出しを！」とのスタンスは、後述する「トヨタ体験」でさらに確たるものとなった。「世界のトヨタ」を相手に、わかったような顔をして対策(つまりはカイゼン!)を語る愚だけは「カトマンズ体験」のおかげで避けることが出来たと思っている。

(3) ポストイベント(対応)からプレイベント(予防)へ

カトマンズで自己嫌悪・自己欺瞞の感を覚えたからこそDIGの決定的な変化が生まれた訳であるが、振り返ってみれば、それは筆者の地域防災への理解の深まりを反映したものであった。ともあれ、「カトマンズ体験」以降、筆者自身がファシリテーターとなり一般市民向けにDIGを行う場合、「被害に見舞われたらどのように対応するか」というポスト・イベントのあり方を議論するDIGは決してやるまい、と心に決めた。そして、DIGの基本的なあり方を、いかに述べるようなものと変えていったのである。

「何もしないでいたら地図上のような事態が生じるかもしれない。でも、私達は、将来を変えることが出来るはず。リスクがみえたなら、そうならないよう、これからこのまちをどのように変えていけばよいか。そのことを一緒に考えようではないか。」

これが、「カトマンズ体験」以降の、すなわち「初期DIG」との決別後のDIGの基本的なあり方となった。遅まきながら「予防に勝る防災なし」に資するものへと、DIGを仕立てることが出来た、と言うこともできよう。

(4) その後の転機(1) : 「トヨタ体験」

「カトマンズ体験」の後も、DIGのまた筆者の地域防災理解の深化を振り返るに欠くことのできない大変大きな体験が2つあった。その第一が、2004年夏以降のトヨタ自動車とのお付き合いである。

トヨタとご縁で学ばせてもらった最大のポイントは、DIGが目指すべきは、「みえる化」から「カイゼン」へという、トヨタのDNAに刷り込まれていることと同じなのだ、ということへの気付きであった。「みえる化」も「カイゼン」も、いわゆるトヨタ語の中でも群を抜いて有名なキーワードである。筆者が「カトマンズ体験」で学んだことは、まさに「みえる化」であったが、「みえる化」は「みえる化」として単独で存在するものではなく、「カイゼン」と相まってこそであり、かつ「不断のカイゼン」こそが求められるべきとのトヨタのDNAは、そのまま地域防災にも当てはまるのだ、ということをお教わったように思う。「世界のトヨタ」相手のDIGのファシリテーシ

ンは、まさに心臓爆発モノであったが、自問自答の末ワークショップで行ったことは、詰まる所「カトマンズ体験」と同じもの、すなわち「リスクの洗い出し」であった。「ここはどうなるのか」「あれはどうなるのか」「外れるのか落ちるのか」「漏れるのか燃えるのか」等々、ひたすら問いかけを続け、得られた答えを書き出して工場の見取り図上に貼り付ける作業に徹した訳であったが、まさにこれが「みえる化」であった。そして、何が課題なのかが関係者の共通認識になれば、そこから先は「カイゼン」の本家ホンモノ、「みえる化」から「カイゼン」が具体化される過程を目の当たりにできたのは、本当に貴重な体験であった。

「トヨタ体験」で確認出来たことは、問われるべきはポスト・イベントの災害対応ではなく、起こり得る被害様相を描き出しつつも、そのような事態に陥らないためのカイゼンへと導くべき、ということであった。カイゼン≒予防と言ってもよいだろう。もちろんそこには、予防の水準をどのレベルに設定するか、つまり経費とどこで折り合いをつけるかというシビアな問題はあつた。ともあれ、経費も含め、求められるべきは「みえる化」から「カイゼン」への流れなのだ、ということをお教わったことは、それ以降のDIGのファシリテーションにおいて、大変大きな自信となった。

(5) その後の転機(2) : 「阪神淡路大震災復興10年検証事業体験」

「トヨタ体験」とほぼ同じ時期の2004年の夏から冬、兵庫県「阪神淡路大震災復興10年検証事業」に携わり、「自主防災組織等の活動に対する支援」のテーマを担当した。自主防災組織等のみに焦点を当てた議論では問題の本質に迫り得ないと考え、担当者と調整しつつ意図的に「拡大解釈」し、市民防災力あるいは地域防災力とは何かという観点から検証を行ったのであるが、その際の議論は、DIGが目指すべき地域防災のあり方に、明確なものを与えてくれた。

報告書の冒頭、筆者は以下の問題意識を述べた。

地域コミュニティの力(あえて「地域防災力」と呼ぶ)があれば災害への備えは十分かと問えば、むしろそれだけではない。阪神・淡路大震災の大きな教訓の一つは、犠牲者の圧倒的多数は自宅で即死だったという冷徹な事実である。つまりは「地域コミュニティの力」が動き出す前にほとんどは終わっていた、ということである。

したがって問われるべきは、「発災後の、特にいのちを守る段階で何が出来るかに焦点を当てた地域防災力の向上」のみならず、「発災前の、被害の発生抑止に焦点を当てた地域防災力向上」「復旧・復興の長いみちのりに焦点を当てた地域防災力の向上」までをも視野に入れた議論ではないだろうか。

ポスト・イベントに焦点を当てた地域防災力の議論から、プレ・イベントに焦点を当てた地域防災力の議論へ。「復興10年検証体験」で筆者が体得したものは、ここでも、DIGは何のために行われるのかについての議論であり、DIGが目的としている地域防災力(の向上)とはそもそも何なのか、であった。

「復興10年検証」の中で筆者は、地域防災の要素を「構え」「仕込み」「仕切り」の3つの言葉で示した。「構え」とは、「立派な家構えですなえ」「あん

な場所に本拠地を構えるなんて……」という文脈で使われる時の「構え」であり、前者で建物や構造のことを示し、後者で立地や自然環境のことを示す。「仕込み」とは、被害を最小限度に食い止めるための備えは十分か、という意味である。人的「仕込み」も物的「仕込み」もあり、金銭的「仕込み」や制度作りもある。もちろん「仕込み」という以上、災害（被害）が発生してからではなく、それが起こる前が勝負である。最後の「仕切り」は、これは防災に携わる関係機関の連携をどのように形にするか、の意味である。

この中で最も主張したかったのは、もちろんプレ・イベント（＝予防対策）の重要性、すなわち「構え」＝「立地」と「構造」の重要性についてであった。ただ、困難さもあった。「立地」や「構造」の問題を取り上げようとする、当然のことながら貧富の格差の問題に直面せざるを得ない。確かに、阪神淡路大震災で近親者を失った者に「あなたが貧しかったので建物の耐震性が確保できず近親者が死にました」とは言い難い。それでも、あの震災の最大の教訓は、「大震災の時に一番役に立ったのは、普段からの顔の見える関係でした」ではなかったはず、なのであるが……。

4. 「初期DIG」の過ちを越えて

いささか回り道であったが、DIGと地域防災の背景を説明してきたがゆえに、より鮮明に「初期DIG」の過ちを理解してもらえよう。

カイゼンすべき点は少なくとも3つある。いずれも今日筆者自身がファシリテーションを行っているDIGでは考慮しているが、ともあれそれは、①ポスト・イベントに焦点を当てた防災ワークショップの是非、②災害（被害）イメージの「科学性」、③「素人」ファシリテーターの是非、の3点である。

第一点は、「ポスト・イベントの災害対応を語るのでは本質的な意味での防災にはならない」ということを理解しているのか、である。くり返しになるが「予防に勝る防災なし」である。災害対応で守れるものはわずかであるが、しかるべき予防策を講じていけば避けられる被害には絶大なものがある。この、防災関係者であれば誰もが知っているはずのことを伝えずに、なぜ災害対応を問うのか。阪神・淡路大震災最大の教訓は、死者の圧倒的多数は自宅で圧死・窒息死したことではなかったか。東日本大震災から学ぶべきは「釜石の奇跡」ではなく、「奇跡が起きないと全員が助からないような場所に、学校や病院、社会福祉施設や行政の建物があってはならない」であるはず。地域防災が目指すべきは、やはり予防であり、付け加えればそのことを理解している人材の育成（＝教育）である。

第二点は、DIGを介してしっかりとした被災イメージを持たせられるか、そこにどこまで科学性があるか、である。「初期DIG」でも、被害想定調査を可能な限り活用し、「写真を見せる」「体験者の話を聞かせる」などで被災イメージを持たせることに留意した。しかし、あくまで総論レベルであり、被害想定調査の活かし方も十分ではなかった。例えば、「震度7」「震度6強」「震度6弱」の揺れの差と、築年次・建物種別の被害の差を示した上でDIGを行ったことはなかった。正しい被災イメージは、多少の幅こそあれ参加者の適切な行動（例えば投資）を導くための

前提となり得る。そこにカイゼンの余地はあろう。

そして第三点は、第二点にも関連することであるが、「初期DIG」が「誰でもできる」ことを「売り」にしていたこと、防災の素人にファシリテーターをやらせることを是としていたことである。「初期DIG」には「塗り絵」「地図遊び」の要素が多分にあったため、「宴会幹事」経験者ならば誰でも無理なく出来るレベルの作業指示を出せばワークショップをまわすことができた。しかしそこには「方法論としてのDIG」「DIGを介した正しい地域防災への誘い」はない。つまりは、予防へ、あるいは構え＝立地と構造の見直しへの問題意識もなかった、と言わざるを得ない。市民をどうやって防災に巻き込むかという「出会い」「気づき」「団結」の演出ツールとしてなら素人ファシリテーターでも問題はないのかもしれない。しかし、予防への誘いが無いDIGに地域防災の本質はない。

災害（被害）についての科学的な知識の共有を介しつつ、「予防に勝る防災なし」との軸足がぶれてはならないはず。そう考えるならば、「赤信号、みんなで渡れば怖くない」であってはならず、当然のことながらファシリテーターには、災害・防災についてある程度の専門性が求められたのではないか。このように考える時、「初期DIG」は随分と罪作りなことをしてしまったのではないか、と思わざるを得ないのである。

5. DIGの「現在」と「将来」

紙幅が尽きた。述べたいことは多いが、多くは次の機会に譲らざるを得ない。ともあれ、今日、筆者自身がファシリテーターを務めるDIGは、予防への誘い、すなわち災害に強い地域を作るためにどこをどう変えていけばよいのかに焦点を当てたものとしていることは、強調しておきたい。

最後に一言。現在学童期を過ごしている子供たちは、「スーパー広域災害」発生時には社会の中核世代として活躍している（してもらわなければならない）世代である。「○○という事態が発生したら……」というようなポスト・イベントの災害対応でどうにかなるような代物であるはずもない。避難を学ばせればよい？冗談を言ってもらっては困る！「執行猶予の約四半世紀を用いて、想定される巨大災害を受けても被害を受けないような社会を作ること！」ここにこそ、私達現役の防災研究者が生涯をかけて問うべきテーマがあると筆者は考えている。

DIGはそのための有効なツールとなると考えているが、その具体的要素については、稿を改めて述べることにしたい。

【付記】

本論文の原型は、2008年5月、地域安全学会に対して学術論文としての査読を受けるべく、投稿したものである。学術論文としての体裁に難ありとして、査読をパスすることは出来なかった。ただ、地域防災に関心ある多くの読者諸兄にとっては、学術論文としての体裁は二義的な問題であろうと判断し、提示する次第である。